

## 火種と大きな炭

- 江戸時代の後半に米沢藩の藩主で、上杉鷹山（とうざん）という人がいました。政治改革を進めたいのに、家臣がなかなか思うように動いてくれず、途方に暮れていました。
- 鷹山がある宿場に行ったとき、荒れている町に絶望して、灰皿を手にして、「この国は、この灰のようにどうしようもない」と嘆きました。
- それを耳にしたある老人が、「殿様、その灰皿の中をかき回してごらん下さい」と言ったので、言われた通りに灰の中をキセルでかき回すと、小さな火が見つかりました。
- 次に老人は、「その炭火の脇に新しい炭を置いて、ふう～って、吹いてごらん下さい」と言うので、その通りにすると、小さな火が大きな炭に移っていきました。
- 老人は、「ほら、火種さえあれば、炭に火がつきます」と笑顔で言いました。
- 城に戻った鷹山は家臣を集め、「あなたたち一人一人が火種になって、その心の火を町全体に広げてほしい」と話しました。
- 鷹山は、江戸時代の優れたリーダーとして今も語り継がれています。

- 学級委員になったリーダーの皆さんに言います。皆さんは火種です。学級のみんに、学年のみんに、熱い思いを伝えていって下さい。
- もちろん、すでに美香保中学校はとてもいい学校だなあと私は思います。でも、よりよきものを求めて、もっといい学校にしていくことができるのではないのでしょうか。
- 不器用でもいいんです。失敗してもいいんです。一番大切なのは、「素敵な学級にしたい！」「素敵な学年にしたい！」「素敵な学校にしたい！」という、よりよきものを求めていく情熱と行動力です。
- 学級委員にならなかった皆さんに言います。皆さんは炭です。リーダーたちが火種となってあなたに火をつけようとした時、その火を更に燃やす大きな炭となって下さい。
- まさしくこの火種と大きな炭の関係こそ、『一生懸命には一生懸命』
- 「ばらばらで一緒」の集団になっていくためのカギです。
- 火種と大きな炭。今後の皆さんに期待しています。

(060419 前期生徒会認証式より)